

稚内北星学園大学 2016 年度卒業式・式辞

本日卒業となりました24名のみなさん、おめでとうございます。卒業生のご家族・関係者の皆様にも、お喜びを申し上げます。また、稚内市長をはじめ、来賓としてご臨席いただきました地域のみなさま、お忙しい中を誠にありがとうございます。本日は、彼らが巣立っていく姿をあたたく見届け、励ましていただきたく存じます。

4年前のことを振り返ってみたいと思います。

2013年は、東京オリンピックの開催が決まり、富士山が世界遺産に登録された年であり、他方では、ホテル・百貨店・飲食店での食の偽装が相次いで発覚した一年でもありました。この年の流行語大賞を受賞したのは「今でしょ!」「お・も・て・な・し」「じえじえじえ」「倍返し」の4つです。北海道では暴風雪で9人が亡くなり、JR北海道の事故が相次ぐとともに検査データの改竄も発覚しました。稚内では、副港市場が「海の駅」に認定され、「緊急告知防災ラジオ」の配布がこの年に始まりました。稚内版「恋するフォーチュンクッキー」には本学も参加しましたし、40人が踊った「みなと南極祭」では敢闘賞を受賞しています。TVHで本学のキャリア支援の様子が放映されるとともに、画家の高橋英生さんを学生が記録した映像作品「文化の懸け橋を目指して」が制作されたのもこの年でした。

いずれのことながらも、ついこの間のことだったように感じてしまいます。

しかし、この4年間は、みなさん一人ひとりにとって濃密な時間であっただろうと推察します。授業で知識とスキルを磨き、教員や友人と語らって新しいものの見方を知り、アルバイトで働くことの難しさや楽しさの一端を実感し、恋愛に悶え、趣味に没頭して寝食を忘れ、等々。そして本学が地域の知の拠点としての補助事業を本格化させた2年前からは、地域の子どもたちへの教育支援に携わったり、映像などのかたちで地域情報の発信を行ったり、まちのイベントで活躍したりするなど、稚内・宗谷地域とのかかわりで活動する場面が増え、そこに多大な時間と労力を注いだ人も多いかと思えます。

学生時代のそうしたすべての生活体験や活動は、人生にとっての大きな学びになっているに違いありません。

みなさんは、「情報メディア」を幅広く総合的に学んできました。そして、〈まちを教室に〉しながら、地域の人と結びつき、地域に支援されながら学ぶ機会を多く持ちました。

社会の中に課題を見つけ、その課題を解決するために情報メディアの力を活用する実践を経験したのです。そうした経験の中でみなさんが身に付けたものは、知識やスキルという言葉に収まりません。例えばそれは、未知のものごとや人に対する好奇心、難しいことに取り組もうとするチャレンジ精神、最後までやり遂げる責任感、きちんと話を聞いて相手の立場を理解しようとする真摯な態度、チームの役割分担の中で発揮する独創性、多角的あるいは俯瞰的にものごとを把握しようとする客観的な視点など、これからみなさんが社会人として生きていくうえで大切なものばかりであり、今後も継続してさらに豊かにしていかなければならない能力です。

そしてそれらは、私たちが、そしてみなさんが、支え合って生きていくために必要な力です。

経済学者の暉峻淑子さんは、私たちはみな「個人」であると同時に「社会人」であり、また自然の一部として生きている「自然人」でもあるということを前提にしながら、「社会人」であることの意味を議論されています。この意味での「社会人」は、就職できない人・しない人も、リタイアした人も、そして子どもも含まれます。社会というネットワークを構成しているという意味において、あるいはともに社会をつくっていくという仲間として、私たち人間はみな、社会人です。

しかし「支え合っている」という実感を失いがちな現代社会の状況に向けて、暉峻さんは次のように警鐘を發します。

社会のつながりの中にいる「社会人」としての意識がなくなると、未来に対する責任も、希望も、よりよい社会への改革の意気込みもなくなり、こざかしくたち回る処世術だけが目標になるような気がする。その結果は、生き苦しい個々ばらばらの自分の利益を考えるだけの社会になるだろう。

つまり、本来の「社会人」というのは、とりあえず状況に適応していればいいのか、お金を儲ければ成功だとか、自分さえよければいいだとか、そういう生き方をとる人のことではなくて、社会とのつながりを大切にしながら、お互いにとって良い環境を築いていこうとする人のことなのだ……およそそんな風に理解したいと思います。

「今だけ、カネだけ、自分だけ」、これは「3 だけ主義」と呼ばれているそうですが、それではいけない、とあのクラーク博士も言っています。何のことかと申しますと、みなさんは、クラーク博士の“Boys, be ambitious.”、「少年よ、大志を抱け」という言葉をご存知だと思います。では、その続きをお聞きになったことはあるでしょうか。

こうです。

少年よ、大志を抱け。

しかし、金を求める大志であってはならない。

利己心を求める大志であってはならない。

名声という、つかの間のものを求める大志であってはならない。

人間としてあるべき すべてのもを 求める大志を抱きたまえ。

さまざまな困難が存在する現実の社会の中で、そうした大きな志を持つというのはきれいごとのように聞こえるかもしれませんが、しかし、地域の課題に取り組んだ経験を思い出してください。そこで、みなさんは「今だけ、カネだけ、自分だけ」という意識で取り組むことなどできなかったはずです。課題に立ち向かうときには、よりよい状態を未来に見据えながら、損得勘定抜きに、みんなが満足できるよう努めたに違いありません。〈まちを教室に〉した学びは、社会全体にとってみればささやかなものであったとしても、みなさん自身の志を試し、磨く機会となったのです。さきほど私が、本学でみなさんが知識やスキルに加えて学んだことは「支え合って生きていくために必要な力」なのだと述べたのは、そういう意味です。

本学のこのような学びのために、学生たちの活動を見守り、支援してくださいました、この地域のたくさんの方々に改めて感謝申し上げます。

卒業生のみなさん、身に付けた情報メディアの知識とスキルを、「支え合って生きていける」社会のために、よりよい社会のために、どうぞ生かしてください。皆さんのこれからの人生が実り多い、幸福なものでありますよう心から祈念して、私の式辞といたします。本日は、誠におめでとうございます。

2017年3月15日

稚内北星学園大学 学長・斉藤吉広